

第3章 歴史文化把握の方針

1. 文化財調査の経緯とその履歴

過去に市内で行なわれた文化財調査の歴史を振り返ることは、多久の郷土史研究や文化財保護の経緯やその後の歩みを知る上でも大きな意味があると考えられる。また、今までに行われた調査や対象となった文化財の傾向を把握し、今後それを活かすことで歴史文化の活用、さらにまちづくりに発展させるなど特色のある成果を望める。このような視点から、調査の不足部分を補うために必要な新たな課題・テーマを見出すことにも繋がると考えられる。

(1) これまでの文化財調査

1) 文化財調査以前

多久市立郷土資料館に収められた膨大な古文書等の歴史資料のうち、『^{たんきゅうゆうし}丹邱邑誌^{よりふさ}※』と題した古資料は、近世多久家の儒臣深江順房（1771 - 1848）の手による。全5冊の線装本で、巻之一から最終巻之五までに沿革、地理、郷村宿駅、産物、年代記等も含め、多久邑に関する多くの事柄を書き収めたいわゆる地誌である。

内容は、詳細かつ多岐にわたり、現在においても多久の郷土史研究の基礎資料と評価されている。本書の執筆は、儒学者であった順房自身の学問的動機によるもので、彼の晩年まで推敲^{すいこう}を重ねたとみられており、邑内のあらゆる事柄を総合的に把握しようという意志が感じられる。

多久には、江戸時代中頃、領主多久家によってその本拠地（多久御構内）に郷校東原庠舎と、孔子を祀る多久聖廟が創建された。以来、儒学（朱子学）を主体とした教育と、聖廟そしてその祭祀「釈菜」を守り伝えた歴史があり、その営みの中で多久の人々に培われた学問への希求が『丹邱邑誌』を生む背景にあったと思われる。多久の歴史・地域的気風を示し、現在の郷土史研究にも通じる先駆的取組みと捉えられる。



写真 3-1 深江順房著『丹邱邑誌』



写真 3-2 深江順房の墓（南多久町長尾）

※中国で「^{たんきゅう}丹丘」とは昼夜常に明るい仙人が住む理想郷を意味する。

近世の多久において邑内を示す美称に用いたが、「丘」は孔子の名が「孔丘」であった為、差し控えて「邱」の字にあて代えたという。

2) 多久における文化財調査と保護の契機

江戸時代の末頃につけて、日本人の学問への志向は漢学から蘭学、洋学へと変わっていった。明治維新を迎えた後、加速した社会の近代化・西洋化のなかで、それまでの漢学は衰退し、その漢学で

ある儒学の象徴であった各地の孔子廟はやがて顧みられなくなり、数を減らしていった。

明治 16 年（1883）、多久の孔子廟である多久聖廟の荒廃に心を痛めた初代佐賀県令（県知事）鎌田景弼（1842-1888）は、修理を呼びかける漢詩「以て謀る修理之事」をつくり、その翌年には、地元多久に聖廟保存会が結成された。聖廟の修理に向けた保存会の活動は、鎌田の逝去により一時頓挫したが、実業界で財を成した高取伊好（1850-1927）などの支援を受け、明治 40 年修理に着手、同 42 年に完了した。



写真 3-3 多久聖廟（恭安殿）と仰高門

聖廟保存会は以降、多久村議会、佐賀県議会議員を歴任したのち、生涯を儒学研究と聖廟の普及に捧げた大塚巳一（1869-1950）を中心に、旧多久邑史談会（多久史談会）としても活動を続け、大塚は大正 8 年に『多久聖廟沿革』、大正 13 年には『孔夫子の一生』を著した。彼らの聖廟調査と働きかけにより、鎌田の呼びかけから 38 年を経た大正 10 年（1921）、多久聖廟は内務省より県内初の国史跡指定を受けた。その後、昭和 8 年（1933）に廟建物（恭安殿）が特別保護建造物（国宝）の指定を受けている※。以来、多久聖廟は多久の文化財保護の象徴となり、この建造物の保存活動を契機として郷土史の調査研究と保護の動きは始まったと言える。

<関連図書>

『旧多久邑人物小誌』	昭和 6 年（1931 年）	旧多久邑史談会
『小城郡誌』	昭和 9 年（1934 年）	小城郡教育会

※昭和 25 年の文化財保護法施行に伴い、特別保護建造物から国重要文化財に指定変更。

昭和 32 年には孔子像を収めた八角形の厨子、聖龕が重要文化財に追加指定された。

3）市史編さん事業による市内の文化財総合調査

太平洋戦争の戦時体制下は、多久の郷土史研究にとって下火の時期だった。終戦後、戦争への反省から科学的分析に基づく新しい歴史教育の必要が生じた。昭和 25 年、大塚巳一の逝去で研究が途絶えつつあった史談会の村史発刊の意志を引き継ぎ、同年、学校（多久中学校）の校長と社会科教諭を中心とした多久部教育会・社会科班が発足した。

この研究班は、昭和 29 年 5 月に旧 5 か町村を合併し多久市が誕生した後は、多久市郷土史編纂委員会となり、研究書籍の発刊や若い研究者の育成に寄与した。

昭和 38 年には郷土史発刊への強い要望に応え、翌年の市制 10 周年を記念して『多久の歴史』の編集が企画された。多久市助役を長に市会議員、教育委員会や関係課の職員、先の郷土史編纂委員会のメンバーを委員



写真 3-4 『多久市史』多久市史編さん委員会

に含む多久市史編纂委員会が設置され、多久市域における初の総合的調査がおこなわれた。そして、39 年、史談会の頃からの念願だったともいえる郷土史書『多久の歴史』が刊行された。の刊行後、多久市史編纂委員会は解かれ、かわりに多久市郷土史研究会が発足したのである。

その後、市制施行 50 周年（平成 16 年）に合わせた事業として平成 10 年より市史編さん事業が開始され、『多久市史』が刊行された。『多久の歴史』が刊行されて 40 年余りが経過することから、新たな研究成果による市史内容の増補、刷新を図り、全 6 巻および人物編が制作された。

このうち『多久市史 第 6 巻 集落史編』（平成 20 年）は、地元住民の協力を得て市内全域の文化財調査が行われ、域内 102 地区（現行の行政単位では 107 地区）毎の所在文化財を記録するなど、より地域の在りようを詳しく記したものとなっている。

<関連図書>

『志田林三郎博士』	昭和 30 年	多久市郷土史編纂委員会
『水江事略安順公譜』	昭和 30 年	多久市郷土史編纂委員会
『封建時代の生活』	昭和 30 年	多久市郷土史編纂委員会
『国寶多久聖廟』	昭和 33 年	多久市郷土史編纂委員会
『丹邱概史』	昭和 35 年	多久市郷土史編纂委員会
『多久の歴史』 『資料編』	昭和 39 年	多久市史編纂委員会
『多久市史 第 1～6 巻・人物編』	平成 12～20 年	多久市史編纂委員会

4) 市内埋蔵文化財調査のはじまり

昭和 35 年、東京明治大学の杉原莊介助教授（当時）率いる調査団により、多久市多久町にある三年山遺跡・茶園原遺跡の発掘調査が行なわれ、鬼の鼻山北麓一帯に産出する安山岩（サヌカイト）を用いた石器製作遺跡群の存在が初めて明らかにされた。

当時、日本列島における旧石器文化の存在を証明した^{いわ}岩宿遺跡（昭和 21 年、群馬県）の発見により、全国各地で旧石器時代遺跡の発見が相次いでいた。日本考古学協会では、九州における様相を探るべく西北九州総合特別委員会を設置して調査を計画し、その一環として多久市での旧石器文化を解明するための発掘調査に至ったのである。この調査は多久市のみならず九州における旧石器時代を対象とした初めての学術調査であった。

多久が調査地に選ばれた理由は、地元の児童が同地より石器を採集した報告が教諭から佐賀県教委を経て、遠く東京にまで届いた事がきっかけであったと調査報告書には記されている。

この出来事によって、市内の先史時代研究も注目を集め、多久考古学会の発足（昭和 44 年）と、同会誌『鬼鼻山』の発刊など活動の契機となった。そして、市内の遺跡・古墳の分布や出土資料の紹介が盛んに行なわれるようになった。



写真 3-5 明治大学による三年山遺跡調査
（昭和 35 年当時の写真）

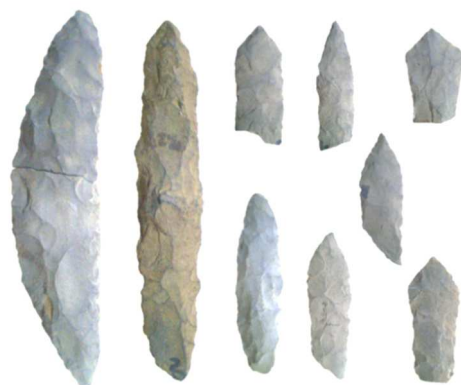


写真 3-6 多久産出安山岩の石器

昭和 49 年には行政による市内初の発掘調査が開発に伴い行なわれ、県内有数の弥生時代の環濠集落跡と 200 基を超える甕棺墓が出土した牟田辺遺跡（第 1～3 次）の発見に繋がった。牟田辺遺跡の第 1 次調査（昭和 49 年）は多久市が調査主体であったが、佐賀県教育委員会文化課文化財調査係を調査担当者としておこなわれた。そして、第 2 次調査（昭和 51 年）からは、多久市において最初の文化財専任の担当者（社会教育係）が発掘調査に参加した。

その後、昭和 53 年の佐賀県遺跡地図刊行を機に、行政主体による埋蔵文化財の調査が本格的に進められていった。現在、市内に確認された遺跡は各時代 147 遺跡を数える。



写真 3-7 牟田辺遺跡と復元住居見学のようす（昭和 52 年当時の写真）

<関連図書>

『佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡』（考古学 第 9 冊）

昭和 58 年

明治大学

『鬼鼻山 No.1～3』

昭和 44～46 年

多久考古学会

『ふるさとの石』

昭和 52 年

多久考古学会

『多久市文化財調査報告書 第 1～57 集』

昭和 50～平成 29 年

多久市教育委員会

5) 文化財保護審議会設置と文化財指定に向けた調査

多久聖廟の史跡指定翌年の大正 11 年、県に佐賀県史蹟名勝天然記念物調査会が設置され、翌 12 年にカササギ生息地が佐賀県天然記念物に指定された。同生息地域には多久市域も含まれている。

次いで多久市内では、昭和 33 年に若宮八幡宮神殿（多久八幡）、34 年に山崎経塚出土品、46 年には相の浦の球状閃緑岩（天然記念物）が佐賀県指定文化財となり、多久市内において指定により保護すべき文化財が多く存在する事が知られていった。

昭和 51 年には、多久市文化財保護条例の施行と多久市文化財保護審議会の設置により、多久市による文化財の指定に向けた選定調査が始まった。これにより昭和 53 年から平成 22 年にかけて、計 31 件が市指定文化財となっている。

また、既に指定を受けた文化財について内容把握、あるいは保存修理などに伴う調査が行われた。重要有形民俗文化財の肥前佐賀の酒造用具は、昭和 63 年の国指定に伴い資料総数 2,334 点の台帳整備が行なわれた。

昭和 62 年から平成 2 年、多久聖廟の廟内にかねてより虫害、雨漏りが生じたことを受け、国及び県の補助による半解体の本格的な保存修理が実施された。



写真 3-8 肥前佐賀の酒造用具



写真 3-9 川打家住宅

その際、聖廟敷地における発掘調査（75 m²）で創建当時の瓦などが出土したことにより、それらの瓦を再現し、明治期の修理で銅板葺となっていた屋根を本瓦葺に改め、内部床を^{せん}敷にして当初の姿に復元している。

さらに、昭和 49 年に国重要文化財指定を受けた肥前の代表的くど造り民家である川打家住宅と、平成 8 年に市の指定となった森家住宅は、所在地沿線の交通環境の変化で文化財の保存に不適正となったため、平成 10 年から 12 年にかけて解体移築修理が行なわれた。川打家住宅撤去後の敷地を^{すぐや}発掘した際に、前身となる建物跡を検出したほか、解体した建築材の転用関係調査では旧来直屋の建物が後にくど造りに変遷したようすが明らかとなった。

<関連図書>

『重要文化財 多久聖廟保存修理工事報告書』	平成 3 年	多久市
『重要文化財 川打家住宅移築修理報告書』	平成 13 年	多久市

6) 資料館を拠点とした古資料等の調査

かつて多久町西の原の西溪公園内に所在した旧村立図書館（大正 12 年建造）は、現多久市立郷土資料館（昭和 55 年開館）の開館以前、県内初の村立図書館として長く村民に親しまれた。

図書館時代の昭和 22 年、旧多久領主末裔から多久家が保有した古文書類が大量に持ち込まれたのが、後年多久市の特色ともいえる郷土史に係る資料の収集と古文書解読研究の契機となった。

現在、同資料は多久家資料および後藤家文書（昭和 33 年寄贈、53 年佐賀県重要文化財指定）として保存され、佐賀の近世史研究においても重要な位置をなしている。



写真 3-10 旧図書館書庫（レンガ造書庫）

特にそのうちの『御屋形日記』等の日記類は、江戸初期から明治維新に至るまで、連綿と多久家領主屋敷などにおける時事を記した膨大な資料であり、これを契機として主にその研究解読を目的とする研究者と民間による研究団体「多久古文書の村」が発足（昭和 53 年）した。その後に組織された多久古文書学校とともに現在も解読作業は鋭意継続されている。

資料が収蔵された郷土資料館に併設し、歴史民俗資料館（昭和 56 年）、先覚者資料館（平成 6 年）が開館すると、館の規模拡大と共に民間と協働した民俗資料や人物史に関する資料の調査収集、旧家の蔵に埋もれた資料の掘り起こし、東原庫舎の漢籍など儒学関係資料にも対象を広げ、その目録作成・把握調査が進んでいった。

また、昭和 55 年には市民の文化活動においても大きな動きがあった。多久市立中央公民館の開館を契機として、多久市文化連盟の発足、市内文化団体の結集化が行なわれ、多久市郷土史研究会と多久考古学会が統合し、あらたに多久市郷土研究会としてスタートした。会員は定例会により郷土資料館蔵資料の調査や、郷土史、考古、民俗、地理、自然など幅広いテーマの調査研究を行い、市制施行 30 年目の昭和 59 年から以降、それらの成果発表などを主にした会誌『丹邱の里』の発刊を行なっている。

< 関連図書 >

『多久古文書の村 村だよりNo.1～21』	昭和 54 年～平成 28 年	多久古文書の村
『水江臣記』	昭和 61 年	秀村選三・細川章・多久古文書学校編集・校註
『丹邱邑誌』	平成 5 年	深江順房撰 多久古文書の村・秀村選三・細川章校註
『丹邱邑誌漢文資料講解』 (『丹邱邑誌』別冊付録)	平成 5 年	荒木見悟著
『佐賀藩多久領の研究』 (多久古文書の村叢書 第一冊)	平成 12 年	三木俊秋著
『御屋形日記 第 1～4 巻』	平成 16～29 年	秀村選三監修・多久古文書の村編集・多久古文書学校校註
『丹邱の里 第 1～16 号』	昭和 59 年～平成 28 年	多久市郷土研究会

(2) 文化財調査の評価と課題

前項では過去多久の文化財保護の起こりや調査の経緯、団体の調査活動などを振り返り、それらに関わった人や団体の存在と努力、今日までの流れを再確認した。現在の多久市の状況を鑑みて、多久ではどのようなテーマの歴史や文化財についての把握が特に行われてきたのか、また十分に取組むことができなかったものは何かについて考えてみる。

資料 3-1 多久市郷土資料館蔵および民間研究団体を含む主な資料調査一覧

資 料 名	内 容	収 蔵 年 (調 査 年)	点 数	備 考
多久家文書	近世領主多久家の文書・記録を中心としたもの	昭和22年 (昭和36～45年)	3,184点	昭和53年3月、「多久家資料及び後藤家文書」佐賀県指定
鴨打家文書	多久家家老鴨打家の文書・記録を中心としたもの	昭和38年 (昭和38～39年)	481点	
副島家資料	明治初期戸長であった上酒造、石炭採掘当をした副島家の文書資料と多久家家臣中西、深江家文書	昭和39～47年 (昭和36～49年)	2,368点	
聖廟資料 (東原庫舎資料)	郷校東原庫舎所蔵の漢籍本を中心としたもの	旧村立図書館が当初から所蔵	5,482点	
旧町村役場資料	旧町村役場の行政資料(明治初期から昭和29年4月まで)	昭和38～43年 (昭和40～43年)	14,676点	
安倍氏文書	安倍宗五郎の明治期の石炭経営資料	昭和49年 (同年)	98点	
後藤家文書	長島庄塚崎に平安時代末から土着した武雄後藤氏の中世武家文書	昭和49年 (昭和53年)	118点	平成15年、多久家資料と目録合本作成
相浦家文書	多久家家臣相浦家の文書	昭和44年 (未調査)	一式	
炭鉱資料	昭和47年佐賀県最後の閉山坑、西杵坑・明治佐賀坑の用具類を含む	昭和43～48年 (未調査)	トラック2台分	
	ふすまの下張り、聞き取りテープ	昭和45～50年 (未調査)	一式	
歴史民俗資料館 所蔵国書	旧図書館時代からの国書と装本、明治初期の教科書等含む	当初から所蔵 (昭和63～平成元年)	621点	
廟山文庫蔵書	聖廟保存に尽力、故大塚巳一翁(明治2～昭和25)が蒐集した漢学を中心とした文庫	平成4年 (平成5～6年)	3,942点	

1) 多久で特に進められた文化財調査

①多久聖廟とその周辺

多久では、江戸中期以降の歴史的特色とともに、保存会が保存運動を行った多久聖廟がいち早く注目を浴び、それに関連する文化財の調査把握が行われてきた。その後の調査研究の対象やテーマとしては以下がある。

- ・ 多久聖廟と枳菜
- ・ 郷校東原庠舎の設立と以降の教育の歴史
- ・ 同校の教育における基礎であった儒学（朱子学）とその祖孔子の人物史
- ・ 同校の教育が生んだ先覚者（出身者）と教育者や儒学者（儒林）の業績等
- ・ 東原庠舎と聖廟を創建した近世多久氏の歴史

特に早期にその価値が明確にされた多久聖廟を中心に、それに関連した文化財が重視されており、その経緯が今日多くの多久市民の郷土認識を形成したともいえる。

②古文書及び文献資料の収集

そのような中で、それらのテーマに関わる古文書・文献資料の調査収集及び整理・目録等の作成に係る実績は、その量・質において特筆すべきものである。

東原庠舎蔵書の漢籍類は、同校の歴史が明治 2 年（1869）に閉じたのち、やがて旧多久村立図書館に移り長く保管されていたが、昭和 22 年多久家文書の収蔵をきっかけに、膨大な歴史情報を今に伝えるものとして見直されることとなった。以来、整理が進みまた同様の文献類の収集も行われていった。そのほか、昭和 29 年の市制施行時に集積されていた合併前旧町村役場資料についても保存が行われるなど、多久の文書文献資料の重要性の再発見を経て、現代の資料にも対象を広げた取り組みが継続的に行われている。



写真 3-11 多久市郷土資料館（先覚者資料館）
漢籍等の保管展示状況

2) 未指定文化財等を含む文化財把握の今後の課題

一方で東原庠舎や多久聖廟の他に所在する市内の文化財については、その把握なども含めて課題をのこした状況にあるといえる。

①民家等の歴史的建造物の保存

全体として多久市内にはある程度の古民家等建造物が残っているが、個人が所有する民家の保存に関しては、権利等で容易に立ち入れない面や、自治体の財政状況に絡む認識があったことから、保護等の取り組みは進んでいない。過去の調査においても一括的な調査は実施されておらず、近年でも、本市にゆかりのある近代の歴史的人物の生家が、十分な調査が行われることなく解体された例がある。今後は歴史的建造物のリスト化や市民・所有者への広報により意識を高め、建造物の登録等の拡充を図るための環境づくりを行う必要がある。そのためにヘリテージマネージャー等の活用も考えられる。（本項について、佐賀県教育庁文化財課 小野将史氏のご助言を頂いた。）

②炭鉱産業に係る建造物等の調査と保存

かつての旧 1 町 4 村を合併した多久市の市制施行の行動力として、明治以降活性し、昭和 40 年代の閉山により幕を閉じた多久の炭鉱産業があげられる。この鉱業生産時期の土地利用で残された関連の建造物は、坑道口構造や昇降機櫓、鉄道輸送にともなう積み出し関連施設、従業者の炭鉱住宅があり、減少しながらも今なお目にすることができる。

これらについてもほとんどが民有地に所在し、詳細調査は行われておらず全体的な把握はできていない。多久の炭鉱時代前半は、中小規模経営の炭鉱会社が乱立する様相であり、それぞれの推移の把握は難しく、また後期の三菱や明治鉱業など大手資本会社の経営した炭鉱も詳細な情報は残されていない。多久市の産業史を示す歴史遺産として保存を検討していくべきであり、市民共有の意識づくりとともに、建造物等のリスト化を図る必要がある。また、採炭から運搬、従業者の生活など、炭鉱産業における一連を網羅的に把握することが望まれる。

そのほか前記の大手鉱業会社は、炭鉱事業の合理化のうで炭鉱周辺の都市計画整備も行っており、中多久地区や明治佐賀地区、あるいは多久駅周辺地域など現多久市の市街構造の形成において関連する点から、町並みや領域の保存について同地域も認識しておくべきと思われる。炭鉱関連遺跡については、将来的には周知の埋蔵文化財包蔵地として登録し、記録保存措置の実施も必要になるとと思われる。(本項について、佐賀大学大学院工学系研究科 三島伸雄教授にご助言を頂いた。)

③域内文化財の総合的調査の継続

文化財の調査には、種別や時代などのテーマごとに把握を行なっていく場合と、文化財の種別・時代を問わず、一定域内を総合的に把握する総合調査などが考えられる。前述の古文書等の調査収集は前者にあたるが、多久市において文化財の総合的な調査は市史書籍刊行のための現状調査として行なわれている。本質的課題としてそれらが市史刊行のための調査であり、その完成後は次の市史刊行計画における調査まで文化財の状態や置かれた環境の推移等、継続的把握が十分になされていない点が挙げられる。昭和 39 年の『多久の歴史』から、平成 12～20 年『多久市史』までの調査の空白期間にも幾つかの文化財は消失していることが考えられる。市内に広く分布する様々な文化財の状態を継続的に把握する手段、方法の検討が必要と考えられる。

④文化財における美術的価値の把握

多久市内の神仏像、石造物、絵画や、絵唐津などの出土古唐津陶片、多久聖廟の装飾・天井画などは、歴史上の価値のほか美術工芸品としての調査と評価により新たな価値が見いだされる可能性がある。他にも、草場佩川など儒学者や多久出身人物が残した書画類、「多久家資料及び後藤家文書」(県重要文化財)に含む肖像画や絵図類、儒学関連資料「廟山文庫」には、孔子聖蹟図などの卷子、書冊などがある。膨大な資料のなかから拾い上げ、細かな調査把握と評価を行っていくことが望ましい。(本項について、佐賀県立博物館・美術館 副館長 福井尚寿氏にご助言を頂いた。)

⑤文化財を含む周辺の自然環境の把握

文化財が所在する周辺の自然環境といった側面の他に、郷土の歴史の中で人々に利用された自然の産物が多数みられる。それは、岩石や石炭、植物、または陶器に用いられた陶土等をはじめ、市内に今現在も存在しているものもある。これらと人との関わりを知る上で、その自然史的種別・性質等の把握が必要と考えられる。(本項について、佐賀大学文学部 角縁 進教授にご助言を頂いた。)

（３）本構想策定における基礎調査の成果

指定の有無を問わず、市内に所在する多くの文化財の継続的把握の必要性を前項で挙げた。

多久市では、『多久市史』刊行のため、地元協力を得て文化財の総合調査が行われた。各行政区単位で調査は実施され、行政区域内に立地する社寺や石造物などの文化財、また継承される祭りや行事、芸能などを総合的に拾い上げている。その成果は平成 20 年刊行の『多久市史 第 6 巻 集落史編』に市内文化財の多くとして紹介されており、本構想策定の趣旨から基礎的資料として参考にできる。

しかし、調査の開始から約 19 年、同書刊行から 9 年が経過(平成 29 年現在)した今、その間に総合的把握を意図した調査は行われておらず、指定文化財など行政が保護する文化財や主だって地域に知られるものを除いて、紹介された多くの文化財の現状は十分に把握されていない。また同書による紹介後、既に失われた文化財がある可能性もあり、本構想の策定に向けて、市内文化財の現状や残存数の確認が必要と考えられる。また、ここでの把握件数が以後、広く市内文化財の保護における基礎数としても捉えられる。この項では平成 28 年度歴史文化基本構想策定事業により主に実施した基礎調査で得た結果の概要を記す。なお、調査成果については、町別基礎調査整理簿としてまとめ、主だった内容は前章「第 2 章 多久市の概要と歴史文化の特徴」の各項に反映した。

１）基礎調査実施の経緯

多久市では国庫補助を受け平成 28 年度より、多久市歴史文化基本構想策定事業に着手した。策定に要する期間は平成 28 年度から翌 29 年度末までの 2 か年度に定め、同 28 年度は市内文化財ほか関連事項の事前把握・調査の実施と位置づけ、『多久市史 集落史編』を把握における基礎資料とした。

基礎調査は、まず同書に紹介された文化財等の一覧化を行ない、それを基に同構想策定委員会の構成団体である多久市嘱託員会に協力を依頼し、各地区の嘱託員にそれぞれ担当地区内において『多久市史』に記載がある文化財の現状確認を行なって頂くこととなった。

２）行政区など調査対象地域と調査地点に関する整理

現在の多久市は昭和 29 年の市制施行以来、東多久町・南多久町・多久町・西多久町・北多久町の 5 か町からなる。各町内には概ね集落単位を基礎とする行政区が行政単位としてあり、市内における行政区総数は現状 107 か所である（平成 29 年現在）。

行政区を構成する集落について、その多くは自然発生的な定着居住をその成り立ちとするが、過去には増減があり推移したことが知られている。小集落内の居住者が転居などで不在となり、存立しなくなる集落がある一方で、戸数の増加をみせる集落も一部ではある。昭和 20 年代以降には、炭鉱開発にともない、また山間部土地利用のため入植により新たに集落が現出した例や、また戸数の増加や集落の立地などで行政区の分離編成が行われることもあった。

そうした集落の変遷などにより、長い目でみると行政区の数にも若干の変化があるが、基礎調査は現行の行政区の状態を対象とした。

なお、調査の基礎資料とした『多久市史 第 6 巻 集落史編』では、地区の編成や歴史的観点から分離・統合された行政区を 102 か所の調査地点（地域）として認識整理しており、本基礎調査でもそれに倣うこととした。

資料 3-2 基礎調査対象調査地点(地域)一覧

多久市の行政区数 基礎調査対象調査地点 107行政区 102地点(地域)									
東多久町		南多久町		多久町		西多久町		北多久町	
28地点		16地点		15地点		15地点		28地点	
1	裏 納 所	29	西 山	45	下 鶴	60	藤 川 内 上	75	相 の 浦
2	大 門	30	井 上	46	東 の 原		藤 川 内 下	76	大 工 田
3	大 畑	31	駄道・天ヶ瀬	47	西 の 原	61	宿	77	原 口
4	平 林	32	後 野・平 原	48	岡	62	板 屋 上	78	申 川 内
5	北 坊	33	瓦 川 内	49	桐 岡		板 屋 下	79	松 ケ 浦
6	平 合	34	長 尾	50	道 祖 元	63	八 久 保	80	岸 川
7	松 瀬	35	西 ノ 谷	51	浦 町	64	船 山	81	四 下
8	柳 瀬	36	庄	52	西 町	65	駄 地	82	多 久 原
9	天 山	37	中 小 路	53	東 町	66	谷	83	両 の 原
10	渋 木	38	上 田 町	54	撰 分	67	山 口	84	中 山
11	古 賀 一 区	39	牟 田 辺	55	宮 ノ 浦	68	猪 鹿	85	中 の 原
12	古 賀二区東	40	桐 野	56	石 州 分	69	平 山	86	山 犬 原
13	古 賀二区西	41	谷 下	57	中 野	70	平 古 場	87	東 原
14	古 賀 平	42	笹 原	58	栄 町	71	平 野	88	前 田
15	山 ノ 上	43	大 野	59	明 治 佐 賀	72	白 仁 田	89	小 侍
16	古 賀 三 区	44	田 柄			73	倉 持	90	番 所
17	別 府 一 区					74	吉 の 尾	91	横 柴 折
18	別 府 二 区							92	筋 原
19	別 府 三 区							93	高 木 川 内
20	羽 佐 間							94	新 栄 町
21	石 原							95	旭 町
22	仁 位 所							96	立 山
23	宝 蔵 寺							97	中多久団地一区
24	平 和 町								中多久団地二区
25	池 ノ 平							98	浦 山
26	旭 ケ 丘							99	自由ヶ丘
27	古 賀 山							100	砂 原
28	両 子							101	泉 町
								102	メイプルタウン



写真 3-12 地元説明

※今回の基礎調査及び同補足調査の結果では、『多久市史 第6巻 集落史編』の記載に従い、60 藤川内上区・下区は「藤川内」、62 板谷上区・下区は「板屋」、97 中多久一区・二区は「中多久団地」とし、101 泉町は住所（大字）に従い南多久町の所属に加えた。

3) 基礎調査の方法と調査時期

多久市では、各行政区に原則1名ずつ、市と行政区間の相互連絡補佐等を担う多久市嘱託員を定めており、現在その合計人数は104名となっている。嘱託員は一旦各町嘱託員会に組織されるが、最終的には多久市嘱託員会とし会長を置きまとめている。

調査では、『多久市史』に紹介された文化財の抽出一覧化作業を行ない、102か所の調査地域について調査表を作成し、その資料を基に嘱託員が現地文化財や祭り行事の開催状況等、所在確認を実施、多久市が返却された調査表の取りまとめを行なう方法とした。

市は、町ごとに年3回のペースで嘱託員会の開催を行なっており、各嘱託員への趣旨説明及び調査依頼、調査表資料の配布はその場をもって行なった。調査時期については以下の表で示す。

調査時において「途絶」としたものは、かつて市内に古くから伝わっている文化財が市史編纂時には既に無くなった有形物や、行われなくなった祭りや行事を指している。

また、「滅失」は市史編纂時には存在したものや、行われていた行事や祭りが消滅したり無くなったものを指す。

資料 3-3 基礎調査 調査表

調査名	依頼先	調査に要した期間
行政区域内文化財等の 所在確認基礎調査	各町嘱託員会(5町)	平成28年11月25日～平成29年2月10日
同調査再確認(補足調査)	各町嘱託員会(5町)	平成29年7月27日～平成29年9月27日

なお、平成28年度の基礎調査終了後に文化財の所在について、一部認識違いを市民及び策定委員よりご指摘頂いたことを受け、平成29年度中において先の調査結果を基にした再確認(補足調査)として再び嘱託員に確認依頼を行なった。本構想に掲載した数値に関しては補足調査後の数値であり、より市内の実情に近いものであると考える。

東多久町

裏納所区 嘱託員 様

行政区域内文化財等の所在確認基礎調査一覧表

平成28年 11月 28日

：返却希望日

平成28年 12月 15日(木)まで

：提出先

各町公民館、または中央公民館(生涯学習課)

資料 3-4 行政区域内文化財等の所在確認基礎調査
(調査表表紙)(例)

<本一覧表の記入のしかた>

- ・ 下記の一覧は、『多久市史 第六巻 集落史』(平成20年刊行)等に記載されております貴行政区内に所在の、文化財(社寺・石造物・祭り・芸能・行事)などの一覧です。
- ・ 各欄の文化財につきまして「現在の有無」を、下記の要領で「○」「×」「△」の記号により記入欄にご回答お願いいたします。

「○」…… 多久市史等の記載のとおり、現在も現地に所在している

「×」…… 現在は存在しない、また途絶えている(理由が明確)

「△」…… 所在がわからない(盗難含む)、または移設等の変更があった

※「△」に該当する文化財の移設など変更があったものにつきましては、下記の例を参考に「詳細・備考」欄にご記入ください。

記入例：「○年頃に○○(地区公民館敷地など)に移設。」
「途絶えていたが、○年頃に復活。」

※ なお、本一覧に記載がなく、追加の要望がある場合は下方の「空欄」をご利用ください。
(目安としては、過去50年間に渡り継続・存在してきたものを想定ください。)

資料 3-5 行政区域内文化財等の所在確認基礎
調査(記入方法)

東多久町 に属する		史跡名・名称	場所	成立年	説明・内容	現在の有無	詳細・備考
石造物	こうしんとう 庚申塔	尾鷲宅裏	1682	庚申塔 二壬戌年	○奉拝請書面金剛口 平時天和	△	現在、尾鷲宅にあっては、所蔵にあり 大地蔵塔の裏に有る石像では ないであろうか？
石造物	庚申塔	尾鷲宅裏	1880	猿田彦大神 明治十三年一月		○	尾鷲宅裏より松尾宅裏へ 方が分りやすい
石造物	てんまんぐうせきし 天満宮石祠	古賀宅裏	1767	天満宮石祠 天満宮 明和四丁年八月吉日		○	
石造物	だいにくてんぞう 大黒天像	公文宅前		大黒天像		○	
石造物	えびすぞう 恵比寿像	尾鷲健一宅		恵比寿像		△	
石造物	ろくじぞうとう 六地藏塔	福地宅横		ほかに六地藏塔が福地宅横、松浦宅横、尾鷲宅 横にある。		○	
石造物	六地藏塔	松浦宅横		ほかに六地藏塔が福地宅横、松浦宅横、尾鷲宅 横にある。		○	松浦宅ではなく七浦宅 で、その尾鷲宅の宅地と定地間の境の 尾鷲宅は梅崎宅に変わっ ています
石造物	六地藏塔	尾鷲宅横		ほかに六地藏塔が福地宅横、松浦宅横、尾鷲宅 横にある。		○	
行事	だいはんにゃきょう 大般若経			一月九日、区の最初の行事で、諸病が集落に 潜入しないように、毎年一月九日に清心寺と常 應寺の住職を招き、大般若経の転読と集落の入 口となる一四カ所の道路に疫病除けの札を立て る。また集落の各戸にも疫病除けの護札とご飯		○	

資料 3-6 行政区域内文化財等の所在確認基礎調査（調査表）（記入例）

4）基礎調査結果の概要

『多久市史 第 6 巻 集落史編』を主として抽出選定した文化財等の総件数は 2,544 件となった。それらについて市史刊行以後の所在状況を確認するため、102 か所の調査地点（市内 107 か所の行政区）に対し、その存在の有無、継続状況等の調査を行なった。

・減失率などの基準となる抽出数の内訳

市内の文化財 2,544 件の抽出総数全体を町別にみると、東多久町は 628 件、南多久町 423 件、多久町 372 件、西多久町 446 件、北多久町の 675 件に振り分けられる。それらは『多久市史』の記載を参考に「神社」「社」「寺院」「堂」「教会等」「石造物」「祭り」「行事」「宗教施設」「その他」の 10 区分に分類すると、石造物が最も数が多く 1,441 件（56.6%）と半数以上になる。次いで行事 420 件（16.5%）、祭り 331 件（13%）が多い。これら 3 区分のみを合わせた数のみで抽出総数に対して 2,192 件（約 86%）と大半を占めている。

全体の半数を超える石造物は、3,000 基にも届くと一部で予想もされており、実際は市内全体でかなりの数量になる可能性もあり、今後の文化財把握の留意点と考えられる。その数の多さの理由の一つとして、近世までに多久領内に発祥し、石工を生業にした「砥川石工」という職能集団の存在が考えられる。砥川村（地区）は佐賀本藩の財政施策により領地返還（三部上地）されて以来本藩領となり、現在同地は小城市牛津町に所属する。

資料 3-7 歴史文化の現存数（多久市）

多久市	平成 10 年時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	減失率（%）
石造物	1,441	1,336	105	7.3
行事	324	253	71	21.9
祭り	316	290	26	8.2
社寺	73	71	2	2.7
堂	79	75	4	5.1
社	43	41	2	4.7
その他	142	109	33	23.2
計	2,418	2,175	243	10.0

減少数には不明、減失を含む、減失率は平成 10 年時点に対する比率

・回答結果について

嘱託員に依頼した調査表の記載を集計した結果、調査総数 2,544 件から市内全体の合計で「現存」2,175 件、「不明又は移設」132 件、「滅失」111 件、「途絶」126 件との結果が得られた。

「不明」と回答されたものの中には盗難などの場合のほか、所在未確認の例が含まれていると考えられるが、一部文化財の所在に関する情報が地元から喪失されつつある現状を表しており、今後の文化財保存における検討課題といえる。

5) 分析

回答「滅失」「途絶」を含めたところでは、『多久市史』刊行にあたり平成 10 年から各地区の調査が行われ、その時点で既に過去存在したが失われた、あるいは途絶えたとされた文化財は 126 件、その後現在までの 19 年間で滅失（不明含む）は 243 件であった。19 年間の滅失率は 11.5% となった。

これらを合わせた 369 件の内訳をみていくと、行事が 167 件と最も多く、次いで祭りの 41 件となった。特にこの 19 年間で場合は、行事の減少 71 件、祭りについても 26 件が消滅している。それぞれの滅失率は行事が約 21.9%、祭りは 8.2% だった。その原因として、人口減によるコミュニティの変化に伴う後継者、継承者の不足によるものと考えられる。

一方で全体の半数を超える石造物の場合は、19 年間のうちに 105 件が失われている。これらは破損や盗難による減が考えられる。しかし基数が多いため滅失率 7.3% にとどまっている。

このことから言えるのは、文化財の種別それぞれに減少の傾向は見取れるが、土地に所在する石造物や社寺などよりも、行事や祭りなどその維持において特に人が取り組み、参加する必要があるものが、市内の人口減少などの影響で危機的現状に置かれているものと考えられた。

資料 3-8 多久市各町の歴史文化の現存数と人口

	東多久町		南多久町		多久町		西多久町		北多久町		多久市（計）	
神社	7	17.1%	6	14.6%	10	24.4%	4	9.8%	14	34.1%	41	100%
寺院	8	26.7%	7	23.3%	7	23.3%	3	10.0%	5	16.7%	30	100%
社	13	31.7%	6	14.6%	7	17.1%	8	19.5%	7	17.1%	41	100%
堂	14	18.7%	16	21.3%	13	17.3%	17	22.7%	15	20.0%	75	100%
石造物	368	27.5%	210	15.7%	151	11.3%	206	15.4%	401	30.0%	1,336	100%
祭り	80	27.6%	55	19.0%	52	17.9%	48	16.6%	55	19.0%	290	100%
行事	43	17.0%	47	18.6%	45	17.8%	60	23.7%	58	22.9%	253	100%
その他	22	20.2%	7	6.4%	18	16.5%	22	20.2%	40	36.7%	109	100%
総件数	555	25.5%	354	16.3%	303	13.9%	368	16.9%	595	27.4%	2,175	100%
人口	4,767	23.9%	2,847	14.3%	2,888	14.5%	1,041	5.2%	8,384	42.1%	19,927	100%

歴史文化の件数：平成 29 年 9 月現在、人口：平成 29 年 1 月現在

人口比率と歴史文化の総件数比率を見ると、東多久町、南多久町、多久町は、ほぼ同一傾向を示しており、人口に比して西多久町の総件数は多く、逆に北多久町は少ないと言える。

東多久町は旧往還道の分岐点があり、宿場を置くなど近世から交通の要衝であり商業地が多い。明治以降は産炭地となり、炭鉱関連の跡も残っている。人口は 24%であり、寺院・社・祭りの件数が最も多い。

南多久町は牛津川の南北に広がる古い田園地帯で、北東部には条里制の跡が残されていると思われる。人口は 14%であり、社・その他の件数が他の町に比べ最も少ない。

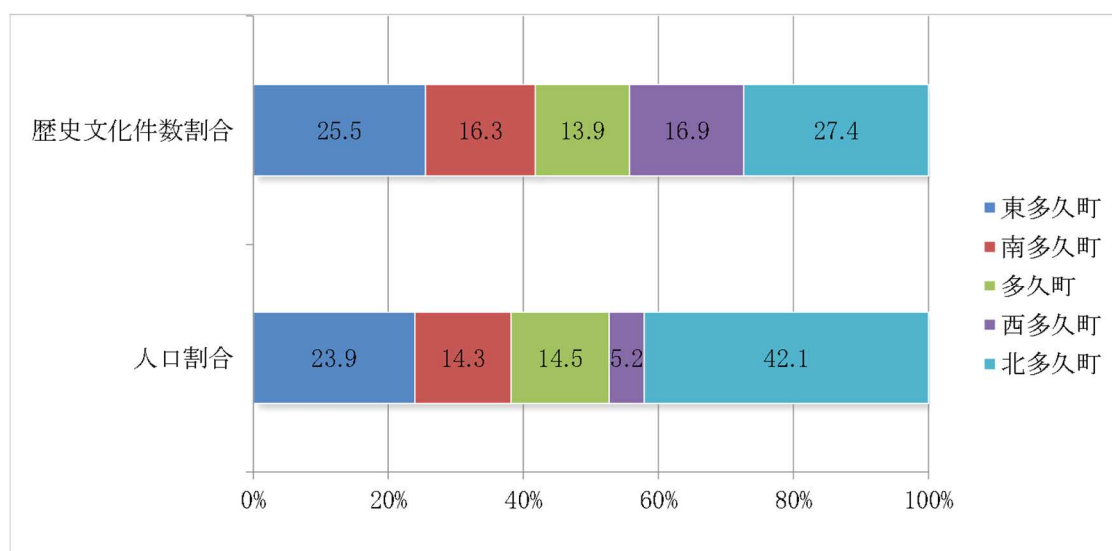
多久町は領主多久氏の城下町があった場所で、多久市域の中心となる町である。城下の絵図も残され当時の町割りや道筋が残されていることがわかる。現在の人口は 14.5%余り、総件数は 14%と最も少なく、堂・石造物が少ない。

西多久町は市内で最も古い町並みを残す農山村で、歴史文化が残りやすい環境である。南多久町と同様に石炭産業の影響を受けておらず、人口の増減が少ない。人口は 5%余り、総件数は 17%となっている。神社・寺院・祭りの件数は最も少ないが、堂と行事の件数は最も多い。

北多久町は近世までは唐津往還が通る町並みであったが、明治から昭和にかけて炭鉱産業の中心地となり、現在も市役所などがあり市の中心地である。人口は 42%であるが、総件数は 27%に過ぎない。神社・石造物・その他・総数の件数は最も多い。また、どの件数も人口の比率 42%を超えるものはない。

北多久町の人口は 42%であるが、総件数は 27%に過ぎない。神社・石造物・その他・総数の件数は最も多い。また、どの件数も人口の比率 42%を超えるものはない。

人口比率と総件数比率を見ると、東多久町、南多久町、多久町は、ほぼ同一傾向を示しており、人口に比して西多久町の総件数は多く、逆に北多久町は少ないと言える。



資料 3-9 平成 29 年 各町の歴史文化件数割合 (%) と人口割合 (%)

次頁以降、5 か町においてここ 19 年間にどのように変化したかを示す表と、そのうち特に数が多い石造物、祭り、行事をとりあげ棒グラフと円グラフに表した。

棒グラフの全体像を概観すると、5 町とも共通して石造物が多く、次に行事、祭りとなり（東多久町は祭りが行事より多い）、数は少なくなるが社、または堂の順になっており他は非常に少ない。減少が著しい行事は、町によっての偏りは少なく同じ傾向を示している。

東多久町と北多久町は、全体の数や分類の数値も近似値を示しており、石造物の比率はそれぞれ全体の 6 割を超えている。祭りと行事を加えた数でも石造物の 4 割程度に留まっている。

この 2 町に関しては、古くは唐津往還の沿道地域であった点がまず考えられ、商業活動の営みにより繁盛を願う石造物が造立され、また人口が増えるに従い講や新四国巡礼などの流行がそれに上乘せしものとみられる。その他、同じくこの 2 町は近代以降の石炭産業で発展し産炭地多久を代表した地域であり、多久市域の中で早くに市街化していった経緯がある。炭鉱の勢い著しい時期、ここには外部から炭鉱従事者が流入し、急速な人口の増加があった。いわば都市的環境下で暮らす新入居者と、旧来からの住民が主体と想像される他 3 町とは、僅かな差ではあるが行事、祭りの保有に関しても意味合いが異なる可能性が考えられる。

他の 3 町の石造物数はそれぞれ全体の 5 割前後であり、祭りと行事を加えた数の石造物数の比率は 6～7 割と高くなっている。今回の基礎調査の結果は、同じ市内であっても地域の発展経緯などを踏まえて多角的な視点で所在する歴史文化を捉え、把握していく必要があることを示していると考えられる。

資料 3-10 歴史文化の現存数（多久市内 5 ヶ町）

東多久町	平成 10 年時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	減失率 (%)
石造物	395	368	27	6.8
行事	52	43	9	17.3
祭り	83	80	3	3.6
社寺	15	15	0	0
堂	16	14	2	12.5
社	11	13	+2	-
その他	27	22	5	18.5
計	600	555	45	7.5

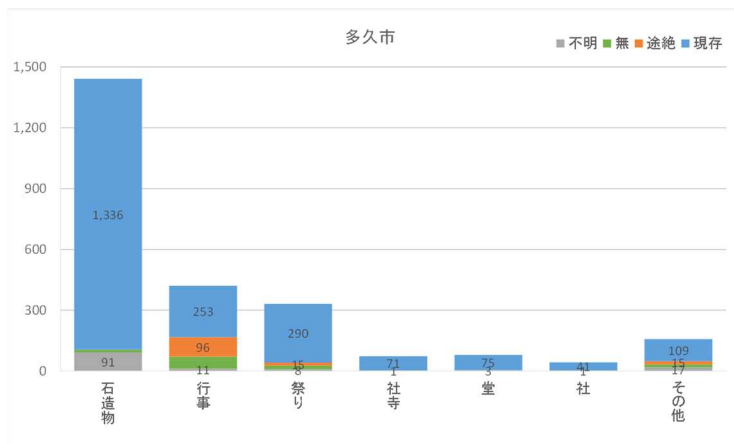
南多久町	平成 10 年時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	減失率 (%)
石造物	224	210	14	6.3
行事	62	47	15	24.2
祭り	64	55	9	14.1
社寺	13	13	0	0
堂	18	16	2	11.1
社	4	6	+2	-
その他	12	7	5	41.7
計	397	354	43	12.1

多久町	平成 10 頃時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	減失率 (%)
石造物	171	151	20	11.7
行事	60	45	15	25.0
祭り	56	52	4	7.1
社寺	18	17	1	5.6
堂	14	13	1	7.1
社	6	7	+1	-
その他	25	18	7	28.0
計	350	303	47	13.4

西多久町	平成 10 年時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	減失率 (%)
石造物	231	206	25	10.8
行事	78	60	18	23.1
祭り	49	48	1	2.0
社寺	7	7	0	0
堂	20	17	3	15.0
社	7	8	+1	-
その他	29	22	7	24.1
計	421	368	53	12.5

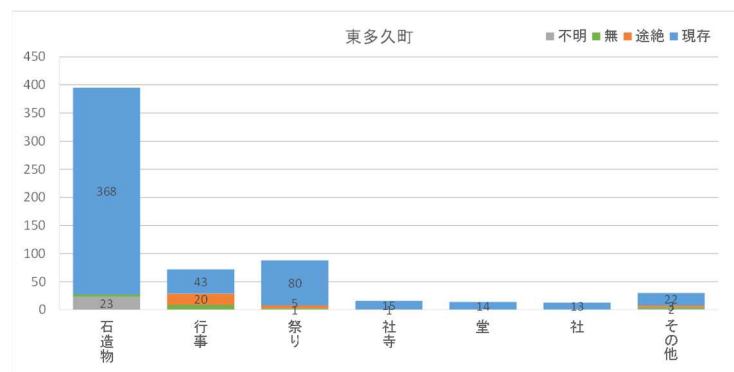
北多久町	平成 10 頃時点	平成 29 年現在	約 19 年間の減少数	減失率 (%)
石造物	420	401	19	4.5
行事	70	58	12	17.1
祭り	64	55	9	14.0
社寺	19	19	0	0
堂	18	15	3	16.7
社	8	7	1	12.5
その他	49	40	9	18.4
計	648	595	53	8.2

多久市	不明	無	途絶	現存	計
石造物	91	14		1,336	1,441
行事	11	60	96	253	420
祭り	8	18	15	290	331
社寺	1	1		71	73
堂	3	1		75	79
社	1	1		41	43
その他	17	16	15	109	157
合 計					2,544

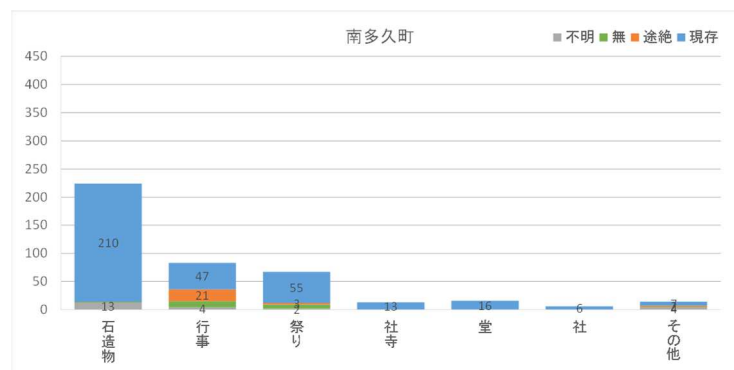


資料 3-11 多久市全域の歴史文化継続状況（平成 29 年）

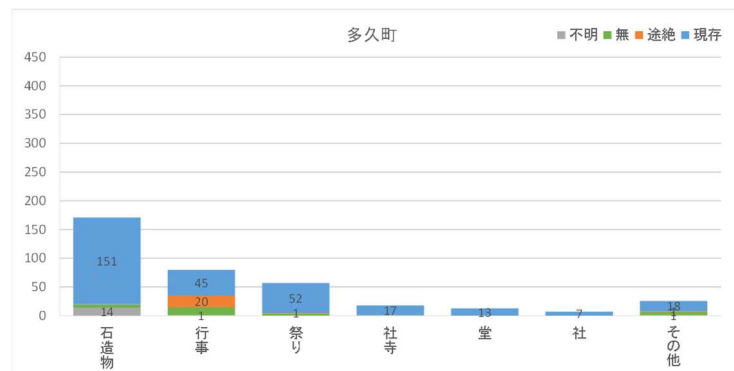
東多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	23	4		368	395
行事		9	20	43	72
祭り	1	2	5	80	88
社寺	1			15	16
堂				14	14
社				13	13
その他	2	3	3	22	30
合 計					628



南多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	13	1		210	224
行事	4	11	21	47	83
祭り	2	7	3	55	67
社寺				13	13
堂				16	16
社				6	6
その他	4	1	2	7	14
合 計					423

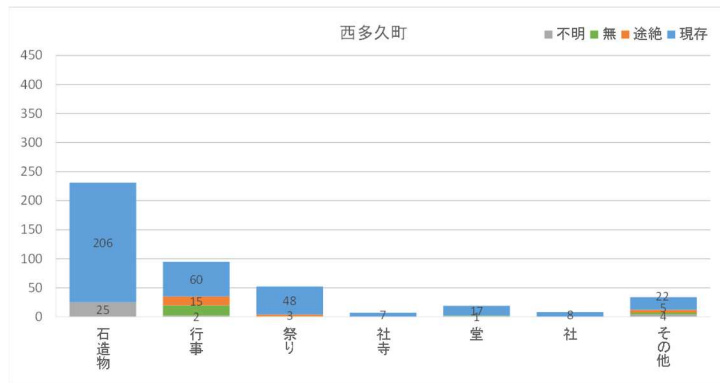


多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	14	6		151	171
行事	1	14	20	45	80
祭り		4	1	52	57
社寺		1		17	18
堂				13	13
社				7	7
その他	1	6	1	18	26
合 計					372

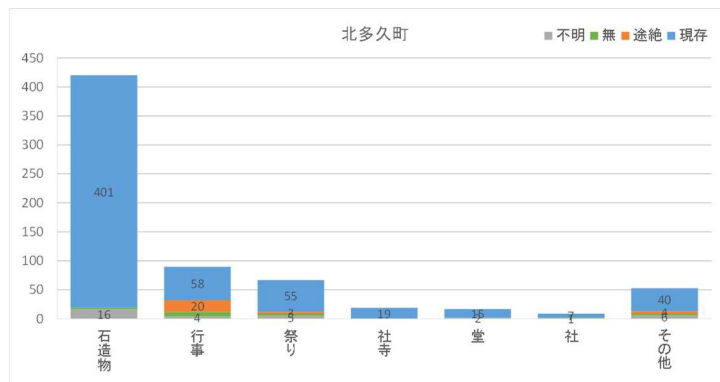


資料 3-12 歴史文化継続状況（東多久町・南多久町・多久町）（平成 29 年）

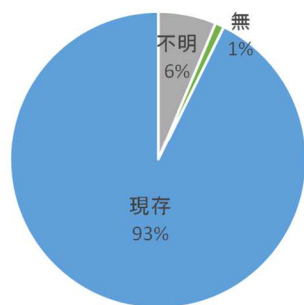
西多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	25			206	231
行事	2	18	15	60	95
祭り		1	3	48	52
社寺				7	7
堂	1	1		17	19
社				8	8
その他	4	3	5	22	34
合 計					446



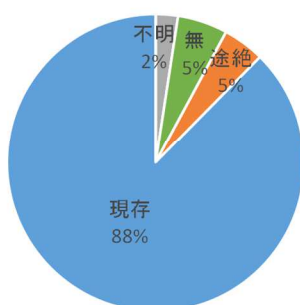
北多久町	不明	無	途絶	現存	計
石造物	16	3		401	420
行事	4	8	20	58	90
祭り	5	4	3	55	67
社寺				19	19
堂	2			15	17
社	1	1		7	9
その他	6	3	4	40	53
合 計					675



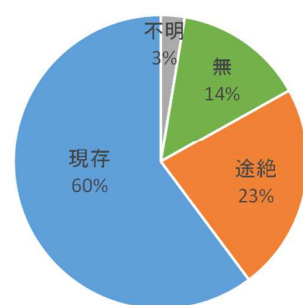
資料 3-13 歴史文化継続状況（西多久町・北多久町）（平成 29 年）



多久市 石造物

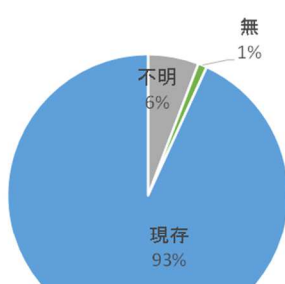


多久市 祭り

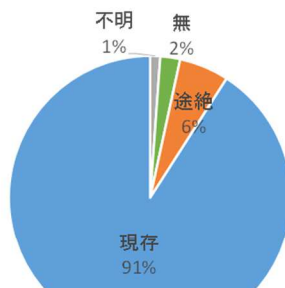


多久市 行事

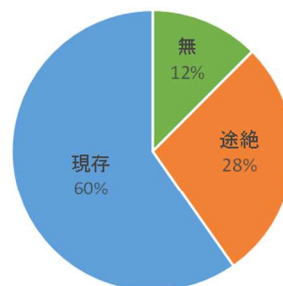
資料 3-14 石造物・祭り・行事の継続状況（多久市全域）（平成 29 年）



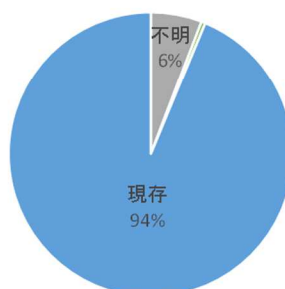
東多久町 石造物



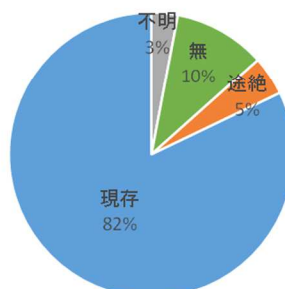
東多久町 祭り



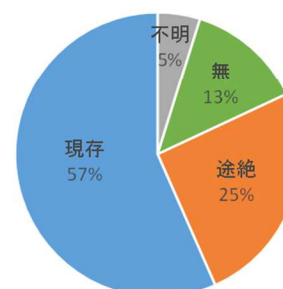
東多久町 行事



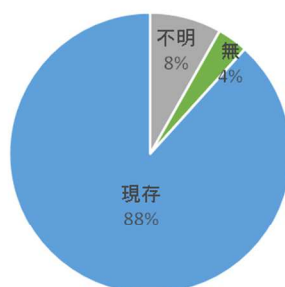
南多久町 石造物



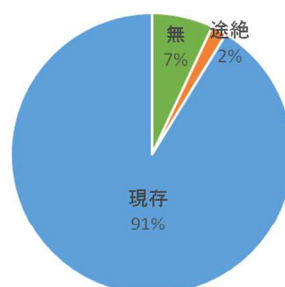
南多久町 祭り



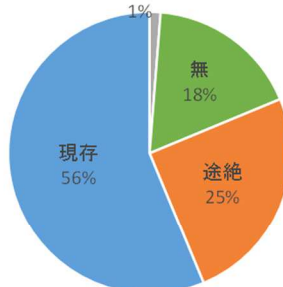
南多久町 行事



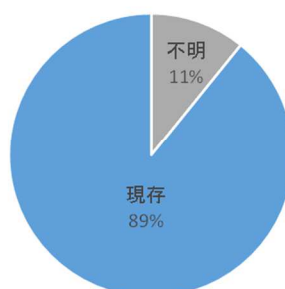
多久町 石造物



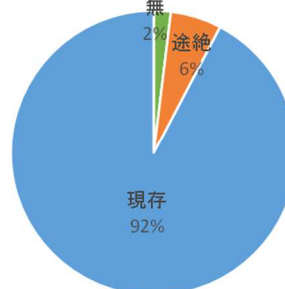
多久町 祭り



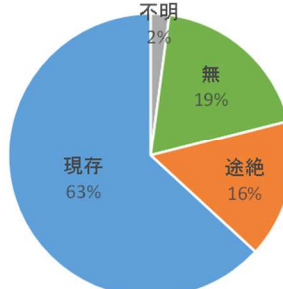
多久町 行事



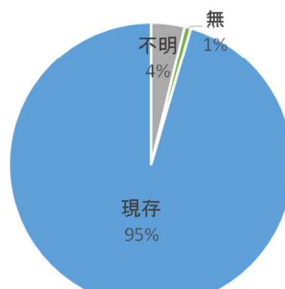
西多久町 石造物



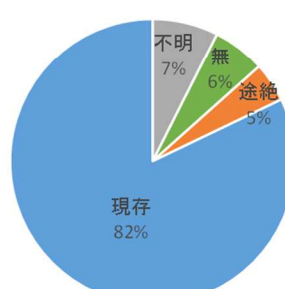
西多久町 祭り



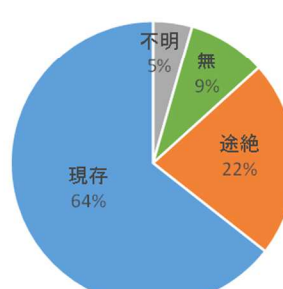
西多久町 行事



北多久町 石造物



北多久町 祭り



北多久町 行事

資料 3-15 石造物・祭り・行事の継続状況（多久市内 5 か町）（平成 29 年）